

INTERVIEW

新潟県立十日町病院 病院長
吉嶺文俊先生



しなやかに, 地域医療に取り組む

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

県立病院のみで義務を終える新潟県の特徴

山田隆司(聞き手) 今日吉嶺文俊先生にお話を伺います。吉嶺先生は新潟県立十日町病院の病院長として今秋に開催される第62回全国自治体病院学会の会長を務められます。学会に向けての意気込みや新潟県の地域医療の現状、方向性などについて伺いたいと思います。まずは先生の簡単なご経歴をご紹介いただけますか。

吉嶺文俊 私は新潟県出身の自治医科大学卒業、8期生です。新潟県は中山間地が多く佐渡などの離島もありますが、それほど住みにくい地域ではなく、また、県立病院も含め自治体立病院が全国でも多い県です。ゆえに自治医大卒業生は県立病院等への派遣で9年間が終わることが多

く、義務派遣内で診療所に赴任することは今までありませんでした。他県の方は羨ましく思うかもしれませんね。

山田 初期研修は新潟大学ですか。

吉嶺 そうです。私の時は1年目が新潟大学でナンバー内科を半年ずつまわり、2年目、3年目に研修のできる大きめの県立病院へ行きました。北の県立新発田病院か、西の上越市高田にある県立中央病院です。新潟県では、概ね4～5年目がへき地の小さい病院の勤務、6年目に後期研修として新潟大学か先ほどの県立病院に1年戻り、7～9年目はへき地の中規模病院、例えば当院にて義務が終わるとというのが典型的モデ

ルです。最初のころは卒業生が少なかったので、6年目に後期研修で大学に戻るのが難しかった時期もありましたが、本人が希望すれば新潟大学の各教室に所属して県も含めてみんなで相談しながらキャリアを積めるという仕組みがあります。それが義務後に活かされてきていて、自治医大の新潟県卒業生は義務後の残県率が確か全国1位か2位だったと思います。他の県に行くところではないという状況もあるのですが(笑)。私は新潟大学で研修後、2～3年目が新発田病院、4年目が六日町国保城内病院(後に城内診療所に再編され、令和5年には南魚沼市民病院附属診療所になりました)。その後県立六日町病院と大学に行き、9～10年目の2年間は県立妙高病院で勤めている時に義務が明けました。そして縁があって指導して下さった院長先生に引っぱっていただくような感じで、県立六日町病院に再び赴任しました。

山田 新潟県では義務年限内に県立病院に派遣され、義務が明けてまた県立病院に就職するという形が多かったのですね。

吉嶺 自分たちの時代はそうでした。

山田 六日町病院にはどれくらいいたのですか。

吉嶺 義務内を合わせると10年ですね。その後県立津川病院に行きました。新潟県は小さい県立病院の院長人事に、私たちの世代をうまく活用してくれました。私の先輩がまず松代病院の院長になり、次に私が津川病院の院長になって、その後ひとつ下の学年の後輩が妙高病院の院長になってというふうに、順々に小さい病院の院長に就きました。

山田 津川病院というのはどのぐらいの規模ですか。

吉嶺 約50床です。私たちの世代が院長になった病院は大体50床程度のへき地の小病院です。でも県立病院だったわけです。

山田 50床では医者も少ないでしょうね。

吉嶺 津川に着任したときはわずか3人でした。

山田 県立病院で3人ですか？人の2倍、3倍働かないといけない状況ですね。当直も大変ですよ。

吉嶺 昔話になりますが、私が研修医2年目の12月の当直は11回でした。でもその月の忘年会はそれ以上あった(笑)。津川病院の院長でも当然当直していました。臨床研修制度が始まってから研修医が来てくれるようになって、医師数が5人に増えてからは回数が減ってよかったのですが。

山田 でも救急車も来るし、子どもも怪我も何でも来ますよね。

吉嶺 何でも診る時代でしたからね。今はそういう時代ではありませんが。

山田 でもそういう経験が、一番実力がつきましたよね。

吉嶺 「1人で勝負してこい」という感じでしたね。住民も協力的で、「先生も大変だから」という感じで見えてくれたので成り立っていたのだと思います。

山田 津川病院の院長に就任されたのは何歳くらいですか。

吉嶺 40代半ばです。当時40代の院長が新潟県内で5人生まれました。